理学療法学科新入生の抱える大学生活不安に関する 2大学間の比較

Comparison between Two Universities of Discomfort with Campus Life of Freshman Physical Therapy Students

金子 千香¹⁾ 平林 茂¹⁾ 菅沼 一男¹⁾ 堀本 ゆかり²⁾ 齋藤 孝義³⁾

CHIKA KANEKO, RPT, PhD¹⁾, SHIGERU HIRABAYASHI, MD, PhD¹⁾, KAZUO SUGANUMA, RPT, PhD¹⁾,
YUKARI HORIMOTO, RPT, PhD²⁾, TAKAYOSHI SAITO, RPT, MS³⁾

¹⁾ Department of Tokyo Physical Therapy, Faculty of Medical Science, Teikyo University of Science: 2-2-1 Senjusakuragi, Adachi-ku, Tokyo 120-0045, Japan TEL +81 3-6910-1010

²⁾ Department of Physical Therapy, School of Health Science, International University of Health and Welfare

³⁾ Department of Physical Therapy, School of Nursing and Rehabilitation Sciences at Odawara, International University of Health and Welfare

Rigakuryoho Kagaku 32(1): 85-88, 2017. Submitted Jun. 23, 2016. Accepted Sep. 26, 2016.

ABSTRACT: [Purpose] The purpose of this study was to objectively clarify the features of discomfort with campus life of freshman physical therapy students by comparing students of two universities. [Subjects and Methods] The subjects were 88 students of A university and 98 students of B university who had entered university in 2015. Concerning the average scholarship on admission, based on the standard deviation for success, A was slightly inferior to B. Using the College Life Anxiety Scale (CLAS), feelings of maladjustment to college, anxiety with campus life, and anxiety about assessment were investigated about 2 months after admission. [Results] The students of A university had significantly high scores of anxiety with campus life and anxiety about assessment. However, there were no significant differences between the two universities in maladjustment to college, which has been reported to be largely related to dropping out of university. [Conclusion] This study had certain fundamental limitations, e.g. the small number of subjects from only two universities. However, it clarified that the maladjustment to college which freshman students felt soon after admission had no significant relationship with scholarship on admission, and was consistent with that of freshmen soon after admission.

Key words: College Life Anxiety Scale (CLAS), freshman physical therapy students, average scholarship on admission

要旨:〔目的〕理学療法学科新入生の早期退学の一因と考えられる大学生活不安感の実態について、大学間比較をすることでより客観的に明らかにすること。〔対象と方法〕2015年に2つの異なる四年制大学の理学療法学科に入学した1年生88名と96名を対象とした。入学後約2ヵ月の時点で集合調査法にて大学生活不安尺度を調査し、3つの下位尺度（日常生活不安尺度、評価不安尺度、大学不適応尺度）の得点を群間比較した。〔結果〕退学などの学籍異動に大きく関連するといわれる大学不適応尺度には両校で有意差はなかった。〔結語〕本研究は2校だけの比較という限界はあるが、理学療法学科の新入生が入学早期に抱える大学不適応感は、入学時の学力にかかわらず、新入生が入学直後に一様に持つ感覚であることが明らかとなった。

キーワード: 大学生活不安、理学療法学生、大学間比較

¹⁾ 帝京科学大学 医療科学部 東京理学療法学科：東京都足立区千住桜木2-2-1 (〒120-0045) TEL 03-6910-1010

²⁾ 国際医療福祉大学 保健医療学部 理学療法学科

³⁾ 国際医療福祉大学 小田原保健医療学部 理学療法学科

I. はじめに

我が国では、現在の高齢社会が今後いっそう進むと予測されている。このため医療、介護、福祉の領域を担う専門の医療人を養成する必要性が高まったことから、2006年頃から理学療法学科を新設または併設する大学が急増した。それに伴い、社会の中で理学療法士の認知度が高まり、理学療法士を目指す学生数も増加の一途をたどっている¹⁾。しかし、理学療法学科に入学した学生の退学率は医療系、医療保健系統学部の中でも比較的高水準であるという新たな問題が生じており²⁾、その退学の原因を検証し、予防方策を確立することが急務であると考えられる。

我々は、理学療法学科学生が抱える大学生活不安や大学不適応感に関するこれまでの調査研究³⁻⁶⁾から、理学療法士の仕事についてよく知らないまま理学療法学科に入学する学生が少なからず存在することや、入学前における大学生活に対するイメージと実際の大学生活とに差異のある学生が入学直後から大学不適応を起こすという実態を明らかにした。さらに、このような学生の入学を未然に防ぐ対策法や、入学後の学生支援をするにあたっての適切な時期と方法など、理学療法学科における早期退学予防方策の確立に向けた一定の知見を得てきた。しかし、これまでの研究はすべて一大学の学生のみを対象としたものであり、より有効に退学予防方策を立てるためには、理学療法学科新入生の抱える大学不適応の実態を広く客観的に明らかにする必要があると考えた。

そこで、本研究では、同じ地方にある他の大学の理学療法学科の新入生に対して大学生活不安調査を行い、2つの大学の結果を比較検討した。

II. 対象と方法

1. 対象

2015年に関東地方にある四年制の総合大学A、Bの理学療法学科に入学した新入生を対象とした。A大学の理学療法学科（以下、理学療法学科A）は88名（男性44名、19.0 ± 0.4歳；女性44名、18.9 ± 0.5歳）、B大学の理学療法学科（以下、理学療法学科B）は96名（男性47名、18.1 ± 0.4歳；女性49名、18.3 ± 0.8歳）であった。

本研究は、対象者が在籍する2つの大学の倫理審査委員会で承認（A大学倫理審査委員会の承認（第14042号）、B大学倫理審査委員会の承認（承認番号15-10-29））を受け、対象者には本研究の意義と内容とを説明し、書面にて同意を得たうえで実施した。

2. 方法

大学生活不安調査にあたっては大学生活不安尺度

（College Life Anxiety Scale：以下CLAS）を使用し、入学直後の2015年6月に、集合調査法によるアンケート調査を実施した。

CLASは、大学の日常生活に対する不安感（以下、日常生活不安）、大学における単位や試験に対する不安感（以下、評価不安）、「不登校」や「中退」といった就学上の問題を生じさせる大学不適応感（以下、大学不適応）の3つの下位尺度に関する計30の設問で構成される⁷⁾。なかでも、大学不適応尺度は従来の不安検査では測定できなかった「大学生活における不適応傾向」を調べることができる尺度とされており^{7,8)}、大学新入生を対象とした調査においては、大学不適応尺度が大学不適応行動出現の指標となることが示唆されている⁹⁾。

調査方法は、それぞれの設問に対して、「はい」または「いいえ」の2件法にて回答を得て、「はい」の回答を1点として各尺度の得点を算出した。日常生活不安尺度の設問は全14問14点満点、評価不安尺度は全11問11点満点、大学不適応尺度は全5問5点満点となる。得られた各下位尺度の得点について、2つの異なる大学の理学療法学科A、B間で群間比較を行った。また、差が認められた下位尺度の設問について、回答頻度の検定を行った。

統計的解析は、各下位尺度の群間差の検定にはMann-WhitneyのU検定を適用した。次に、各群における各下位尺度の回答（はい・いいえ）頻度について χ^2 検定を行い、関連性の度合いとして ϕ 係数を求めた。なお、期待値が5%未満のセルが全体の20%以上の場合にはFisher's exact testを適用した。統計ソフトウェアはPASW Statistics18（IBM社製）を用い、有意水準は5%とした。

III. 結果

理学療法学科A、B間のCLAS下位尺度の得点比較において、日常生活不安尺度と評価不安尺度に差が認められ、いずれも理学療法学科Aで高値を示した（表1）。差が認められた下位尺度の設問の回答頻度について χ^2 検定の結果、日常生活不安尺度の設問では、「4年間で卒業できるかどうか、不安です。」（ $\chi^2=35.402$, $df=1$, $p<0.01$, $\phi=0.439$ ）、「留年したらどうしようと、気になります。」（ $\chi^2=16.692$, $df=1$, $p<0.01$, $\phi=0.301$ ）。

表1 CLAS下位尺度別得点

	理学療法学科A	理学療法学科B
日常生活不安	6.0* (5.0-9.0)	5.0 (3.0-8.0)
評価不安	7.0* (5.0-9.0)	5.0 (3.0-7.3)
大学不適応	0.0 (0.0-1.0)	0.0 (0.0-0.3)

中央値（四分位範囲）。*： $p<0.05$ 。

「先生に『研究室まで来るように』と呼ばれたら何を言われるかととても気になります。」($\chi^2=3.976$, $df=1$, $p<0.05$, $\phi=0.147$), 「授業中、先生の言っている内容がわからなくて、不安になることがあります。」($\chi^2=17.423$, $df=1$, $p<0.01$, $\phi=0.308$) の設問で、理学療法学科 A の学生が有意に多く「はい」と回答した。

また、評価不安尺度の設問では、「必修科目の成績が「D (不可)」だったらどうしようと不安になることがあります。」($\chi^2=4.982$, $df=1$, $p<0.05$, $\phi=0.165$), 「テストを受けていて、わからない問題に出会ったとき、頭の中が真っ白になってしまうことがあります。」($\chi^2=4.554$, $df=1$, $p<0.05$, $\phi=.157$), 「成績のことがきになって仕方ありません。」($\chi^2=6.750$, $df=1$, $p<0.05$, $\phi=0.192$), 「大学の成績のことを考えると、憂鬱です。」($\chi^2=8.476$, $df=1$, $p<0.01$, $\phi=0.215$), 「テストを受けるとき、悪い点をとってしまうのではないかと心配になります。」($\chi^2=10.288$, $df=1$, $p<0.01$, $\phi=0.236$), 「申請した授業の単位がきちんともらえるかどうか心配です。」($\chi^2=9.845$, $df=1$, $p<0.01$, $\phi=0.231$) の設問で理学療法学科 A の学生が有意に多く「はい」と回答した。

しかし、理学療法学科 A, B 間において、大学不適応尺度の得点には有意な差は認められなかった。

IV. 考 察

今回の2大学間のCLAS下位尺度得点の群間比較において、日常生活不安尺度と評価不安尺度では得点差が認められ、いずれも理学療法学科 A で有意に得点が高かった。これら差が生じた日常生活不安尺度、評価不安尺度の設問の回答頻度に対する χ^2 検定の結果、差が認められた設問は、2つの尺度ともに大学の学業成績や成績に付随する不安に関する設問であった。ベネッセコーポレーション算出の合格目標偏差値によると¹⁰⁾、理学療法学科 A の偏差値は54、理学療法学科 B の偏差値は59であり、理学療法学科 Aの方が相対的に学力が低いことが示されている。合格目標偏差値は入学時の平均的学力レベルを推し量る一つの指標に過ぎないが、理学療法学科 A の学生では入学時の自らの学力レベルに対する認識が入学後の学業成績に関する不安感に影響を及ぼし、理学療法学科 B に比べて相対的に日常生活不安と評価不安が高くなったと推察された。また、対象者の在籍する A, B 大学の学部退学率について、入学後1年間の退学率は理学療法学科 A の置かれている学部で5.5%、理学療法学科 B の置かれている学部で1.5%であり、理学療法学科 Aの方が高い退学率であることが示されている¹¹⁾。履修科目の大半が必修科目となる医療保健系統学部の学生においては、成績不振によりスムーズな進級ができないことがあるが、学生や保護者に

とって、4年間で卒業できるかどうかは重要な課題である。入学後に進級のむずかしさとともに退学率が高い現状を知った理学療法学科 A の学生が一層、学業成績に関する不安を増大させたことも推察される。

一方、休学・退学などの大学不適応行動出現に直接つながる指標であると考えられている大学不適応尺度には両校で差が認められなかったことから、理学療法学科新入生における入学直後の大学不適応感、入学時の平均学力レベル以外にも両大学間で異なるであろう教育環境や教育内容、学生支援の取り組みとは関係がないことが示唆された。

今回の調査は、入学間もない6月に新入生に対して調査を行ったことに意味がある。入学後の大学生活が経過するにしたがって、学生を取り巻く大学の教育環境自体がしだいに学生に影響を及ぼすと考えられる。教員の総数、学生一人当たりの教員数、カリキュラムの内容などの教育に直結する要因のみならず、通学の利便性や寮の完備などの他の環境要因も関与し、これら大学特有の要因により、学生の大学生活への適応感や考えも変わってくると思われる。今回の調査は、まだ十分に大学生活に慣れておらず、大学特有の要因にもあまり影響を受けていないと考えられる時期に行ったものである。2大学の限られた数による調査という限界はあるが、理学療法学科新入生が抱く大学不適応に関する不安感は、入学時の平均学力レベルとは関係がなく、入学直後に一様に持つ感覚であることが明らかとなった。

我々はこれまで、一大学の理学療法学科における1年生を対象としたCLAS調査に基づく研究において、大学入学前に抱いていた大学生活イメージと実際の大学生活感とに差異のある学生は入学直後から大学不適応を抱くことや、教員とのコミュニケーションに苦手意識を抱く学生が大学不適応を増大させ、成績不振につながるケースが多い実態を明らかにしてきた。その結果から、理学療法学科入学志願者に対する入学前の方策として、大学進学をめざす高校生に模擬授業やオープンキャンパスの場において、理学療法士の仕事内容や理学療法学科における大学生活の伝達を重視すること、また入試時には理学療法学科における大学生活の特徴や理学療法士の仕事に関する理解度を可否の判定基準に反映させること、入学後の学生への方策としては、早期から教員とのコミュニケーションを図る機会の充実が必要であることを提唱してきた。今回の2校の比較で有意差があった日常生活不安と評価不安に関しては、入学時の学力レベルが関与している可能性があることから、この問題には学力の高い学生を数多く入学させることが最も簡便な解決策であろう。しかし、今回この2つの尺度において回答頻度の高かった学業成績や成績に付随する不安については、本人の努力や教員の支援次第である程度は解消の可能性があるのであるため、上記のような入学前からの接触を通して、

優秀な学生を集める努力をするとともに、大学合格者の入学前教育によって学力をレベルアップさせ、学生に自信を持たせておくことも必要である。

今回の研究により、大学不適應に関する不安感は、入学時の平均学力レベルとは関係がなく新入生が入学直後に一様に持つ感覚であることが明らかとなった一方、入学後の学業成績や成績に付随する不安感は、入学時の平均学力レベルと関係があると推測されたことから、入学前から対処しておくことの重要性がいっそう明らかとなった。我々が先行研究において提唱した理学療法学科への入学志願者と理学療法学科1年生とに対する早期退学予防方策案は、一般化して他の施設での早期退学予防策として導入できるのではないかと考える。しかし、その効果に関しては、今後専門学校や他地方の大学に調査対象を広げ、数多くの対象者で検証する必要がある。

引用文献

- 1) 日本理学療法士協会：理学療法士国家試験合格者の推移。
<http://www.japanpt.or.jp/about/data/>（閲覧日2016年6月6日）。
- 2) 朝日新聞，河合塾：朝日新聞×河合塾 共同調査「ひらく日本の大学」第11回 2014年度調査結果報告。http://www.keinet.ne.jp/gl/14/09/hiraku_1409.pdf（閲覧日2016年6月6日）。
- 3) 金子千香，平林 茂，菅沼一男・他：理学療法学科新入生における大学生活不安と入学様式との関連。理学療法科学，2015，30(4)：539-543。
- 4) 金子千香，平林 茂，菅沼一男・他：専門職への意識と大学生活に対する入学前のイメージとが理学療法学科新入生に及ぼす影響。理学療法科学，2015，30(4)：595-598。
- 5) 金子千香，平林 茂，菅沼一男・他：理学療法学科1年生における大学生活不安の経時的変化とその対策。理学療法科学，2015，30(5)：689-692。
- 6) 金子千香，平林 茂，菅沼一男・他：理学療法学科1年生における学年末試験の成績と大学生活不安感との関係。理学療法科学，2015，30(6)：881-885。
- 7) 藤井義久：CLASマニュアル。金子書房，東京，2013，pp1-23。
- 8) 藤井義久：大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討。心理学研究，1998，68(6)：441-448。
- 9) 山田ゆかり：大学新入生における適応感の検討。名古屋文理大学紀要，2006，6：29-36。
- 10) ベネッセコーポレーション：偏差値から探せる！志望大き々と見つかる検索。<http://kou.benesse.co.jp/hensachi/index.php>（閲覧日2016年6月6日）。
- 11) 読売新聞教育ネットワーク事務局：大学の実2016。中央公論新社，東京，2015，pp18-93。